

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和元年 10月 5日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	鳥井 朋恵

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、東京都千代田区霞が関
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
環境省インターンシップ
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
令和元年9月5日 ~ 令和元年9月19日 (14日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 松木崇司室長補佐、綿貫宏史朗保護増殖係長
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。 今回は、環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室で2週間インターンシップに参加した。
主な活動内容
1. 国内希少野生動物種保全取り組みページの作成 2. 外勤
1 国内希少野生動物種保全取り組みページの作成 (現在の問題点) 国内希少野生動植物種293種についての情報(保護増殖事業対象種、生息地等保護区、生物多様性保全推進事業、レッドリスト、鳥獣保護法、文化財保護法、CITES、地方自治体のレッドリストや天然記念物、条例)が点在して整理されていない。 (作業内容) 293種のうち動物種において、上記の情報や環境省、地方自治体、研究機関、民間企業や地域で行われている取り組みについてWebサイトに集約して掲載するため種別情報をまとめたシートを作成した。 (感想) 希少種について、今まで一種ずつ詳細を調べたことがなかったので、知らないことを学ぶことができ非常に興味深かった。また、環境省の内部の資料に記載されている情報をどこまで公開していいのか、情報保護と普及啓発の両面から考慮して作業するのが難しかった。当然のことながら、法律や施行例、施行規則を読み込むのは初めてで、読み解くのにも苦労した。また、天然記念物を調べる際に、文化財データベースのサイト(文化庁)が使いにくく、ホームページの維持管理の重要性を感じた。
2 外勤の感想
(ア) 環境省レッドリスト 定量評価に係わるワークショップ (内容) IUCNのレッドリストカテゴリーと基準に基づいて作成された環境省レッドリストカテゴリーの定量的な判定基準A~Dについて、運用上の問題点等について議論した。 従来の指定方法では、研究者の感覚が重視され、判定根拠の説明責任が果たせないことが問題視されている。その問題を改善するために定量的な基準を作成したものの、その実用性や研究者の感覚とのギャップを問題視する声が多く見られた。 (感想) レッドリストカテゴリーの定量的な評価基準の問題点と解決策について、定量的基準を運用したい環境省側と、それでは実際の生息状況が表せないとする研究者側の解決策を生み出すのに難しさを知った。
(イ) 環境研究推進費の打ち合わせ (内容) テーマ「希少植物の自生地復元に向けた問題解決と基盤整備」 サブテーマ「希少植物の保全活動における社会的・倫理的課題解決のための科学技術社会的論的検討(=一般市民に対して、生態系保全や再導入に対する認識や考えを問う調査)」 (感想) 普段、大学での研究活動では研究内容をどう役立てるかについて本格的に考えることはないのですが、生物の研究とは一見関係のなさそうな社会的な研究が生態系保全のために必要な興味深い研究であることに驚いた。希少種保全・生態系保全のためには住民の協力や理解が不可欠なはずなので、住民の認識について理解した上で適切なアプローチが必要だと感じた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

(ウ) 生息域外保全委員会（動物の一種）※議論の内容は非公開のため種名は伏せる

① 飼育下個体群管理方針について

議論の中で、飼育下個体群を長期飼育個体群、一時収容個体群、野生復帰技術開発個体群の3つに分類し、それぞれの個体群の飼育目的に応じた管理をすることと理解した。

長期飼育個体群に関する議論の中で、遺伝的多様性の目標値や下限値をどのくらいに設定するのかという議論があった。その目標値や下限値が適切かどうか、それを評価するのが検討委員に求められていることだと私は考えていたが、その具体的な数値が適切かどうかまでは議論が深まらなかった印象を受けた。域内と域外のバランスを保つのは難しい問題で値の設定も難しいのだろうと理解したが、遺伝的多様性についてより詳細な議論が行われてもよかったのではないかと感じた。

野生復帰技術開発個体群については、たとえ野生復帰させるまで飼育個体数が増えたとしても野生で生存できる能力のある個体は限られていることや、繁殖のために飼育する個体と野生復帰させる個体では飼育方法もがらりと変わってくることを全く知らなかったのとでも印象に残った。

② 自然繁殖における課題の評価について

動物園での飼育例が増えて、雄と雌とでどのような個体が繁殖の成功率が高いか、ペアリングの見極め方などがマニュアル化・データ化できるほど確立していることに驚いた。マニュアル化が進めば、飼育担当者が変わった場合や、野生復帰の段階で携わる環境省の職員など飼育に関わっていない人も情報を共有できて、スムーズに野生復帰への取り組みが進むのではないかと感じた。野生復帰には飼育者だけでなく、行政や地域住民やボランティアなど様々な立場の人が携わるので、マニュアル化や情報共有が進めば、人手不足・経験不足も改善されるのではないかと感じた。

③ 地域住民の当該種に対するイメージについて

地域住民は野生復帰に肯定的でも否定的でもなく（あまり興味がなく）、ブランド商品や地域活性化にむしろ関心があるという話が印象に残った。前述したように、マニュアルの普及や情報共有が進んで飼育繁殖・野生復帰に多くの人が携わり、地域に足を運ぶことが、野生復帰での人材不足の改善と地元の経済効果や地域活性化につながるのではないかと感じた。

(エ) 小笠原諸島世界自然遺産地域科学委員会（陸産貝類保全ワーキンググループ）

(感想)

陸産貝類だけでも数十種類、他の寄生物や天敵となる生物も多く種類があり、内容を整理するのが大変だった。小笠原諸島の島によって異なる種が生息していることや、当然のことだが一つの島の中でも分布が偏っていて、どの島のどの地域にどの種が生息しているのか、その種の保全の必要性や現状はどのようになっているのか、十分に理解できなかった。

一点、疑問に感じたことは、陸産貝類保全優先度を決めるにあたり、繁殖技術の確立状況よりも捕獲難易度（希少度）がランク付けにおいて重視されているのが気になった。捕獲難易度が高い（＝希少度が高い）種の方が繁殖技術が確立していない種よりも危機的であるという案だったが、個人的にはそれは逆ではないかと感じた。繁殖技術が確立していないのに優先度を下げてしまうと、いざ本当に絶滅の可能性が高まり繁殖を試みてもなすすべがないのではないかと感じた。

6. その他（特記事項など）

写真については、機密情報が多いため、HPに載せる本報告に添付できるものは撮影できませんでした